第170号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

死者との対話

「死」における悲しみとは、死ぬという事実が悲しいのではなく、共に生きた者が目の前から居なくなった喪失感が人を悲しくさせると中島岳志は言う。

その喪失感の中で、どれほど願ってもその死者はもう私の目の前には現れてくれない。仏壇や墓を通じて生前の姿を思い浮かべ語りかけても何の返事もない。それなのに死者との対話など成立するのか。

仏教文化として死亡日のことを「命日」という。浄土という新たな世界に死者が仏として生まれた日と定義する。そのことから、死者を死者と捉えるだけでなく、浄土という新たな世界に生きる仏という他者と見る必要があると思う。

その浄土の住人である他者は、この世に生きる私にどのような言葉をかけるのだろう。

「死者との対話」は、浄土や仏を認知し、この世に生きる私を見つめ直すことで、自ずと成立するものなのかもしれない。

釈迦弥陀二尊の和合（2）

田中 智教

前号に引続き、ある人の「真宗大谷派寺院の本堂には阿弥陀様の木像を中心に親鸞聖人、蓮如上人、聖徳太子や七高僧の軸がかかっているのに、なぜお釈迦様の軸をかけないのですか」という質問を通して標題について考えてみたいと思います。

そこでまず、曹洞宗などお釈迦様を「釈迦牟尼仏」という本尊として仰がれる宗旨や寺院も多く存在する中で、その本尊や中尊という「格」があると思います。つまり、仏教の常識として、お釈迦様も大切だからといって阿弥陀様の脇侍として軸をかけようとは伝統的にも教義的にもならないのだと思います。どうしてもお釈迦様を安置したいなら、そのための御堂を建立して、もちろんその御堂の中心にお釈迦様を安置しようということになると思います。東本願寺の御影堂門の楼上もそういうことでしょうか。

それなら御堂の中尊を阿弥陀様とお釈迦様の二尊を並列に木像で安置すればいいではないかと質問者に言い返されそうな気もしつつ、友人たちの受け止めを聞くことができましたので紹介します。

一人は、「阿弥陀様を「救主」、お釈迦様を「教主」と区別する意味で、目の前に現れずとも教えの主として今まさに私たちにはたらき、教えを説いてくれている。そのことを法要や法話を通して受け止めることができるのではないか」と。なるほどと思う一方で、東本願寺の御影堂に安置される親鸞聖人の御真影も「今現在説法」のすがたであると伝承されています。まさしく、偶像として安置され存在してくださるからこそ、その教えも実感し易いのだと思うと、すんなり頷くことができませんでした。また、聖徳太子を「和国の教

主」と讃える和讃もあるため、教主であるから安置しないとも言い難いのかもしれません。しかし、受け止めとしては素晴らしいですよね。

また、もう一人の友人は、「浄土三部経」（『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』）がまさにお釈迦様ではないか」と教えてくれました。仏像や絵像としてなくとも、お飾りとして礼盤に「浄土三部経」を飾ります（※写真参照）。参拝する者が目に見える形でお釈迦様を、またその教えを仰ぐことができるという意味でも良いですよね。しかし、理にかなった受け止めであるものの、「お釈迦様の姿」を求める質問に対して、やや積極性にかけると思ってしまいました。積極的な理解を得ようと思う私の根性が間違っているのですが、それでもなにか物足りなさが残るのです。そんな中で先輩に窺った受け止めに大きく頷くことができ、次号、そのことについて記して完結とします。最後に、有名な和讃を紹介して結びとします。（続）

登高座机にある浄土三部経の巻物

他力の信心うるひとを
うやまいおおきによろこべば
すなわちわが親友ぞと
教主世尊はほめたまう

（『正像末和讃』『真宗聖典』五〇五頁）

自分の色

釋　綽智

「春は名のみの風の寒さよ」と早春賦を想いだすような小寒いお彼岸のお中日。廣讃寺で一心寺の前田健雄氏の法話を聴聞する。

開口一番、よく寝られますか？睡眠不足は健康によくないのでね、私は息を吐くときを吸うときより長くしてやっていますと自然に眠くなってきたりしますという話をされた。

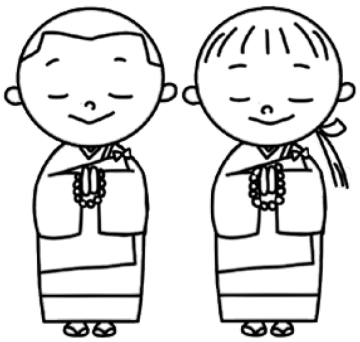
お話の中心は「老い」についてであった。老齢は登山に似ていて登れば登るほど息が切れるが視野が開けてきます。大学で九十一歳の先生が階段を上るのに大変なのに似て歳をとると何もかも衰えてくるが、その後の二時間の講義は平気でされる。仏法もこんなように伝えられてきたのであり大変ありがたい。

かつて治療法のない時代だと老人は延命治療などされるわけでもなかったが、尊敬されていた。逆に今は差別的だ。さらにデジタル化によって置いてきぼりにされている。老人は人生経験が豊富だからいつまでも自分の考えを工夫し変えている。親鸞聖人も晩年まで著作の修正を何度も行っている。

次に死後の話をされた。親子の対話で子が親に、死んだらどこへ行くのかとたずねると親は自分の経験から「あの世」とか「天国」と答えることが多いだろうが、「わからない」という答えが正しい。それは誰も経験したことがないからだ。人はときが来れば死ぬのだ。年齢にかかわらず必ず死はやってくる。ひとり裸で生まれ、ひとり裸で死んでいく。

死後に行く世界を案ずるな。「必ず救うから」と阿弥陀様が約束されている。それが弥陀浄土なのです。

最後に、たった一度の人生、わからないことだらけだが思う存分、精一杯生きていきたいと言われておりました。



行事予定

五月二十八日（土）　十時　親鸞聖人命日のお勤め